

仙台教区サポートセンター

福島デスクニュース

第26号 2016年10月

作成：仙台教区サポートセンター福島デスク
〒975-0001
福島県南相馬市原町区大町 2-197
fukushima.desk@gmail.com
Tel/Fax 0244-32-1531
080-5872-4447
<http://fukushimadesk.blogspot.jp/>

10月1日～2日、福島県双葉郡川内村において、ICRP（国際放射線防護委員会）の協力のもと、「双葉地方におけるダイアログセミナー」が開催された。住民、自治体、専門家、NPO/NGOの国内外の関係者が集まり、双葉地方の生活の回復に向けた経験と課題を共有することを目的に話し合った。

セミナーの一日目、震災当時、高校一年生だった佐藤奈菜さんは、震災から現在に至るまでの体験を発表した。佐藤さんは、現在、長野県の看護大学で学んでいるが、震災時からの経験を踏まえ、来春からは放射線について学ぶために、長崎大学大学院への進学が決まっている。将来は福島のために働きたいと語る佐藤さん。ご本人の了解を得て、ダイアログセミナーでの発表原稿を掲載する。



ダイアログセミナーで発表する佐藤さん

「震災からの復興について思うこと」 佐藤奈菜（看護大学4年生）

本日は、自分自身の体験と、そこから考えたことを踏まえ、「震災からの復興について思うこと」と題して、お話しさせていただきます。

まず始めに自己紹介をさせていただきます。私は、ここ川内村に隣接する、福島県いわき市の四倉町の出身です。震災当時は16歳、放射線については何も知らない高校1年生でした。高校卒業時まで地元で過ごし、現在は大学進学のために長野県に住んでいます。自宅は福島第一原子力発電所から約32kmで、避難指示は出されませんでした。妹と二人で県外の親戚を頼り自主避難しました。また、当時18歳以下であったので、県民健康調査の甲状腺超音波調査の対象の一人です。

原発事故 放射線に対する強い不安（2011年3月）

当時のことをお話しします。一番印象に残っているのは、放射線が何なのかかわからず、強い不安を感じたことです。自分の住む福島県の、見慣れた地図が毎日テレビで流れ、福島第一原発、第二原発からの円が拡大していくのがとても怖かったです。いつ自分の住む地域が円の範囲になるのかと、ただ怯えて過ごしました。やがて、40歳以下と線引きされた安定ヨウ素剤が配布されました。若い人しか助からないのかと思いました。「サイレンが7回鳴ったら飲んでください」という情報が、電話での連絡網で回ってきました。テレビでは流されない情報であったことで、何か隠されていると思いました。メールでは、「イソジンを飲めば助かる」という情報が回ってきました。家になかったため私は飲みませんでした。誰かが助かるかもしれないと思い、その誤った情報のメールを回してしまいました。

私は事故から1週間後に県外へ避難しましたが、その福島で過ごした1週間、残っている人たちに不思議と一体感があつたことを覚えています。水の配給やスーパーの営業を待つ時間に、知

らない人との会話が増えました。

「この辺もそろそろ指示が来るらしい」、「本当はもうこのあたりもだめだけど、いわきは人が多いから、政府も避難区域を拡大できないでいるらしい」。

今となっては、情報の錯綜の中にいたことが分かります。しかし当時は毎日不安でつらく、結局、私も県外へ避難することを選びました。家族や土地と離れて初めてその寂しさ、つらさを痛感し、この決断を深く後悔しました。



多国籍ワーキンググループ。後姿は同時通訳

大学進学 県外での生活で「偏見」や「風評」を知る（2013年～2016年）

高校を無事に卒業し、大学進学を機に長野県での生活がスタートしました。福島県外に出て初めて、偏見や風評の言葉を受けました。「最近の雨は、福島の事故のせいで汚れているから、当たっちゃいけないらしいよ」、「浜通りは人がもう住めないし、魚は食べられない」、「長野県のみんなは、県内産の野菜を食べようね」。これらの言葉は、きっと事故にかかわりのない人たちが、自分たちを守ろうとするための情報だったのだと思います。ですが、一人の福島県民を傷つけるには十分な言葉でした。これらの言葉が、医療職の方や、将来看護職に就くはずの友人たちからの言葉であったことで、とてもショックを受けました。自分のような思いを他の人にさせたくないと思いました。同時に、それらの言葉に根拠をもって答えられず、自分自身も知識がないことに気が付き、自分を含めた看護職にこそ、放射線について知る必要があると考えました。口に出しづらい放射線の問題に関して医療職、とりわけ患者や住民に近い看護職者の理解があれば、復興のための大きな強みになると考えています。

この5年の体験で、医療職として「人と向き合う」姿勢が明確に（2016年～）

これらの経験がきっかけとなり、放射線について知り、人の役に立ちたいと思い、来春から長崎大学大学院へ進学することとなりました。長崎には、原爆投下後やチェルノブイリ原発事故時、支援・研究してきた知の集積と、私が住民として経験した福島原発事故時、早期から支援してきてくださった先生方がおられます。その先生方から学びたいと思い、進学を決めました。

私が一人の住民として思うことは、どんなにつらい出来事であっても、その中に教訓を見出し、それがいつか誰かの役に立つのなら、その思いは救われるだろうということです。そのために、私はこの場でお話しさせていただくことを決めました。あの事故は、200万人の県民が遭遇した事故ではなく、1人が被災する事件が、200万件起きたものと考えています。私は一人の福島県民ですが、代表にはなれません。住民一人ひとりがそれぞれの状況、経験、人生を持っています。支援の必要性もその人の数だけあります。住民の皆さん、無理にとはいいません。これから、皆さんの声を、ぜひ聞かせてください。

そして、私の、一人の医療職者としての目標は、その一人一人の声に耳を傾けることです。これから、この地を離れ2年を過ごしますが、皆さんから語られる言葉を大切にしたいと思います。耳を傾けることから始まり、対話の中で、これからの福島と未来を描き、考えていきたいと思っています。私も、一緒に頑張ります。